

氏名 <sup>いたの</sup>板野 みずえ

本論文は、『新古今集』の時代における和歌をめぐって、歌人藤原良経を主軸としつつ、時間的・空間的な表現を中心に考察したものである。序章・終章のほか、本論は三篇八章と一つの付章、および付論から構成されている。

第一篇は藤原良経の和歌活動について論じる。第一章は『結題百首』を始めとした寂蓮の和歌の良経に及ぼした影響を具体的に指摘し、それが新古今時代以降の空間表現への契機になっていると見通す。第二章は良経がこだわった「風」の独自の用法を跡付け、そこに時間の経過を演出する機能があることを確認したうえで、その機能が「風」を『新古今集』の中心素材へと押し上げた経緯を明らかにする。第三章は良経の和歌に集中的に出現する「心の空」の語句を分析し、外界の景が心中の比喻とならないという微妙な齟齬を抱え込み、景と心の新たな関係を構築していると指摘する。付章は良経の主催した歌会とその題を網羅的に集成したうえで、その題の設定に良経自身が関与した蓋然性が高いこと、組題のあり方に時間意識の深化が見られることなどを解明している。第二篇は、新古今時代における和歌表現について論じる。第一章は歌ことば「春の曙」につき、良経の一首を端緒として、「昔」へと向かうような「心」の動きを捉える時間帯として詠まれている、と結論づける。第二章は新古今歌人の用いる「むすぼほる」について、従来「凝固する・凝結する」の意で解されていたこの語を、「ある事物がある景物を乱し、順調な進行や予想される進展を妨げる」意とし、とくに消失していく景物の危うさや不安定さに焦点化する機能をもつという新見を提示する。第三篇は新古今時代の叙景表現について論じる。第一章は藤原定家の名歌の「よその夕暮」の歌句のうち、とくに「よそ」のもつ固有の表現性に注目する。すなわち、他者から疎外された自己を描き、自己から切り離された他者を想像することのほかに、風景から疎外された自己をも重層的に取り込んでいると指摘して、これを同時代の表現の中で位置づけている。第二章は定家の初期の『源氏物語』摂取を、「一句百首」の「吹き迷ふ」の一首にうかがい、その特徴を物語との距離を保とうとする所に求めている。第三章は歌ことば「ながむ」が、新古今時代には外界を見ることで心を把握しようとする意志的な行為に変化していることを押さえつつ、その変化が釈教歌によってもたらされたものであることを発見している。

本論文は、『新古今集』の中心歌人の一人である藤原良経を基軸としつつ、この時代に特徴的な和歌表現を取り上げて詳細に分析し、新古今時代固有の表現意識を和歌史的に位置づけることに成功している。新古今時代にとどまらず、中世和歌全体へと視野を広げるべきことなど、今後の課題も存するが、本審査委員会は本論文に上記のような研究史的意義を認め、博士（文学）の学位に十分値するとの結論に至った。